

# AMDA

## 多様性の共存

# ジャーナル

特定非営利活動法人アムダ (AMDA)  
<https://amda.or.jp/>  
 特定非営利活動法人 AMDA 社会開発機構  
<https://www.amda-minds.org/>  
 特定非営利活動法人 AMDA 国際医療情報センター  
<https://www.amdamedicalcenter.com/>  
 AMDA 兵庫 <http://amda-hyogo.com/>

2022 年 10 月 25 日 VOL.45 第 303 号 定価 550 円  
 発行 / AMDA 〒700-0013 岡山市北区伊福町 3-31-1  
 TEL 086-252-7700 FAX 086-252-7717  
 E-mail: member@amda.or.jp  
 郵便振替: 01250-2-40709 □口座名: 特定非営利活動法人アムダ

2022 年  
秋号



救える命があればどこまでも

連載インタビュー「支える喜び」シリーズ 第34回

AMDA ネパール初代支部長

ラメシヨール ポカレール 様

AMDA を支えてくださっている方々の様々なエピソードをインタビュー形式でお届けします。今回は、AMDA ネパールの初代支部長 ラメシヨール ポカレール医師です。(聞き手: プロジェクトオフィサー アルチャナ シュレスタ ジョシ)

**AMDA** 菅波代表との出会いについて教えてください。

**ポカレール** 1986 年、ネパールで医学生グループ『Nepal Medical Students' Society』の国際担当をしていた私は、AMSA (アジア医学生連絡協議会) の第 10 回国際会議に参加するため、日本に招待されました。その際、菅波代表は AMSA の創始者として参加しており、滞在先の有馬温泉で同室になったのが最初です。当時、医学生だった私は、「将来的に AMDA の支部をネパールに作りたい」と菅波代表に伝えました。既にインド、インドネシア、バングラデシュなどに支部があり、AMDA の 6 回目の総会で AMDA ネパール支部の設立が決定しました。

**AMDA** ネパール帰国後に AMDA ネパールを設立されたのですね。

**ポカレール** 支部設立を考えた理由の一つに、当時のネパールの医師たちには、国際交流の機会があまりなかったことが挙げられます。私は、設立について同僚の医師たちに話をすれば、必ず協力してくれると信じていました。中には不安に思っていた仲間もいましたが、最終的には私の強い意志を信じて、積極的に関わってくれました。ネパールでは当時、独裁的な王国制度があったので、NGO として登録する時も、「政治的な活動をするのではないか」と政府から懸念されました。しかし、私たちが社会活動を行う医師の団体であることを説明し、1990 年に正式に登録することができました。

最初の主なプロジェクトは、ブータン難民の支援プロジェクトでした。難民支援は経験がなかったものの、難民キャンプを訪問した際、妊婦さんの健康に対する意識、医療従事者の不足、国立病院が遠い等の問題が露見しま



した。そこで難民のための診療所を設立し、医療活動を始めました。難民がいつまでもその地域に留まらないことに加え、当時は周辺にも病院がなかったので、難民と地域住民の両方が医療サービスを受けられるよう、30 床のコミュニティー病院としました。今やその病院は、100 床の総合病院として地域に根差しています。

また、ネパールは妊婦や新生児の死亡率がとても高かったので、小児病院を設立し、死亡率を減らしたいと考えました。しかし、資金がなかったため、日本の病院や他の組織にも、ネパールで小児病院を建設する必要

性を広く訴えました。当時、私は神戸大学で勉強しており、1995 年の阪神淡路大震災の時はたまたまネパールにいたのですが、日本に戻った時、港側の避難所に行って支援活動に参加しました。ネパール人医師たち 3 人も被災者支援に携わったので、そのお礼としてネパールで病院を建てる企画が持ち上がりました。その後、これが「ヒマラヤのふもとから」という記事として毎日新聞に掲載され、この企画から集まった寄付金をもとに「ネパール母と子の病院」が設立されました。

**AMDA** 最後に AMDA を支援して下さっている方々にメッセージをお願いします。

**ポカレール** AMDA ネパール支部を作るために協力して下さった AMDA の支援者の皆様にご心より感謝申し上げます。皆様からいただいた沢山のご支援は、プロジェクトの度に私たちの背中を押してくださいました。AMDA はローカルイニシアチブに基づいて、私たちが提案するプロジェクトを応援してくださっています。今後ともご支援、ご協力のほど、よろしくお願いいたします。

## 内視鏡技術研修

佐藤先生から「一緒にモンゴルに行こう」とお誘いいただき、それとほぼ時期を同時にしてコロナ禍となり実践できず3年が経過。ついにこの日が来ました。この度初めてモンゴルでの内視鏡技術移転プロジェクトに参加させていただきました。

今回は、新しくオープンしたモンゴル日本教育病院でのミッションでした。話を聞いていた3年前と比べると内視鏡技術は確実に向上しているというのが最初の印象でした。まずは上部下部消化管内視鏡の指導を行いました。若い先生たちが実際の内視鏡をさせてもらえないという教育システム上の改善点を感じ、議論を行いました。佐藤先生を中心に行われた、持参したシミュレーターを用いた若い先生たちへの研修は、非常に彼らの刺激になっていました。

モンゴルで使用しているスコープは古い世代のものであり、その多くは故障して使用できないという現実があります。事実、本邦で行っている検査治療を行うための内視鏡が使用できないという問題がありました。癌やポリープ、静脈瘤の内視鏡治療についての講義や、実際の治療の研修では、皆さんの目は非常に輝いていました。



これからのモンゴルの医療、国を改善しようという熱きハートに感銘を受けました。安全な治療をするには技術の習得はもちろんですが、必要な道具を入手することも必要です。この度当院で使用している道具を紹介し、その有用性を実感してくれたと信じています。何よりモンゴルの皆さんの歓迎と熱い気持ちに感銘を受け、私自身の今後のモチベーションになりました。

(小倉記念病院 医師 白井 保之)

## 救命救急研修

モンゴル日本教育病院での内視鏡技術研修に引き続き、モンゴル保健省直属ウランバートルエマージェンシーサービス（通称 103）において、救命救急研修を行いました。

モンゴルの救急車は、日本でのドクターカーに相当します。各救急車に救急医が同乗し、現場での診断と治療ができるので、救急医にはより高い知識と治療技術が求められています。

今回のセミナーではポケットエコーを用い、内科的診断や外傷の診断など、救急医に求められる様々な場面でのエコー診断を中心に行いました。近い将来に救急車にエコー装備が考えられている中での研修は、優先順位の高いものでした。また通常の方法で輸液ルートが確保できない場合、その際に必要となる骨髄内輸液の手技や、様々な状況を想定した客観的臨床能力を向上させるためのプログラムを実践しました。

研修を通してモンゴルの救急医と交流することで、自分が医師になった頃の原点を思い出します。モンゴルの救急医療を担っていく若き医師たちは、情熱と責任感



に満ちています。「今よりもっとできるようになりたい」と願う気持ちがとても大きく、将来が楽しみです。

今回、彼らにとっては初めての経験も多かったようで、楽しそうに一生懸命に研修を受けていました。その素朴で素直な姿勢に、感銘を受けました。AMDAのプロジェクトとして、研修を継続的に実施していくことを期待されています。

(AMDA 理事 佐藤 拓史)

## AMDA 中学高校生会と黒潮町の中学生・高校生との交流事業（2022年9月）

今年度6回目となる高知県黒潮町の中学生ならびに高校生との災害・防災についての交流会を2022年9月3日に実施しました。新型コロナウイルス感染対策のため、オンラインで交流会を実施しておりましたが、今回は3年ぶりに対面での交流会を高知県幡多青少年の家を会場に行いました。交流会には黒潮町の松本町長をはじめ、町職員の方、教育委員会の方、黒潮町立佐賀中学校、黒潮町立大方中学校、高知県立大方高校の16名の生徒さん、AMDA 中学高校生会から11名とペルーからのJICA研修員1名が参加しました。松本町長による挨拶から始まった交流会では、黒潮町の職員の方から町の防災の取り組みについて説明があり、AMDA 中学高校生会のメンバーからは国内外の災害対応についての発表、現地の学



校からは各学校で生徒が取り組んでいる防災活動についての発表がありました。また最後にはペルー人研修員よ



り自国の防災についての発表がありました。交流会の後、AMDA 中学高校生会とペルー人研修員は、災害時にも役立つ防災食（アルミ缶炊飯とカレー）の作り方を青少年の家の職員の方より学びました。

2日目は黒潮町の職員の方に指導を受けながら「逃げトレ」アプリを利用して津波タワーまでの避難訓練を実施しました。その後、津波タワーについての説明を受けました。災害はいつどこで起きるかわからないため、平時からの対策の重要性を改めて実感しました。

（プロジェクトオフィサー アルチャナ シュレスタ ジョシ）

## ペルーからのJICA研修員キャサリン・ドゥガルドさん、AMDAにて「日本の災害対応・防災」についての研修報告

この研修を通じて、災害への備えと対応の重要性は、日本人のDNAにすでに組み込まれていることがわかりました。AMDAは初めて聞く団体でしたが、この組織の頑張りには本当に驚かされました。AMDAの第一の使命とは、命を助ける必要がある場所に向かうことです。



川崎医科大学附属病院のドクターヘリを見学

宗教、政治、距離は関係なく、AMDAは最善を尽くして支援を提供します。AMDAが医療支援だけでなく、国民の心のケアも行っていることを知り、感激しました。

また、西日本豪雨の際には多くのボランティアが高校生であったことを知り、どうすればペルーの若者に防災への関心を持ってもらえるだろうかと考えました。コミュニティの重要性とは、逆境を克服するためお互いを励ますことであり、人々の「生き残ろうとする意志」が不可能を可能にします。災害において犠牲者を生み出したのは、防災に対する人々の無関心さでした。このような経験を経て、コミュニティでは災害への備えと予防の重要性を教え続けています。そして、人々は学べば学ぶほど、計画を機能させるものが人の意志による力であることを実感しているのです。



研修修了式

今回、私自身、『南海トラフ災害対応プラットフォーム』の活動に参加する機会を得ました。高知県黒潮町の学生たちと一緒に津波に備えた避難訓練を行い、「逃げトレアプリ」を使って津波避難タワーに向かいました。

人の役に立つために、私ができることは何でしょうか。この経験を通じて、私はもっと自分の力で変わりたいと思いました。今回の研修は、ペルーと日本を繋ぐ機会となりました。このような研修に参加するチャンスを与えてくださったJICAとAMDAには感謝の思いしかありません。

（JICA「日系サポーター」日系社会研修事業研修員 キャサリン ドゥガルド（研修期間8月2日～9月7日））

# ウクライナ避難者支援活動

## 現在の活動状況について



ウクライナの人道危機発生から8ヶ月が過ぎました。避難者数は発生直後に比べ減少傾向にありますが、避難は今もなお続いています。避難者の多くは子連れの母親ですが、現在は状況の悪化に伴い、ウクライナ国内に留学していた他国の学生も避難してきています。

ハンガリー側の国境の村、ベレグスラーニーのヘルプセンターにおいて、AMDAは避難者に対して、現地協力団体『MedSpot』とともに医療活動を行っています。

7月下旬から、健康面における異常の早期発見を目的

として、メディカルチェックシートを用いて有訴者（病気やけが等で自覚症状のある人）や要配慮者を確認しています。処置が必要な避難者については、近隣の診療所などを紹介し、またストレスを抱える方が多く見られるため、傾聴やマッサージを行っています。子どもたちについては、遊具やおもちゃで一緒に遊ぶなどして対応しています。

医療支援のほかに、現地協力団体『カルパッチャハウス』（ヴァルダ伝統文化協会）が、避難者と現地住民との交流を目的にスポーツや料理のイベントを開催。暑い中での開催であったため、AMDAはスポーツドリンクの配付などを行い、熱中症予防に努めました。

一方、ウクライナ国内の避難者に対しても、食糧や生活用品などを継続的に寄付しています。現地からの情報によれば、経済的困窮のため、低賃金での労働を余儀なくされている方もいるということです。このように、物資や居住場所の提供、仕事の確保など、依然として多くの支援が必要とされています。AMDAは今後も、現地主導で支援を行えるよう関係各所とともに調整を行っていきます。（プロジェクトオフィサー 看護師 長谷 奈苗）

## 現地協力者による寄稿

今年の2月にウクライナで人道危機が始まり、「今回の人道危機に対する支援を行おうと考えている日本の団体の活動に協力できないか」と知人からお話をいただきました。「私でも何か貢献できることがあるのでは。遠くから見ているだけではいけない」と思い、AMDAの活動に参加しました。

最初に、「何処で何が必要で、我々に何かできることはあるのか」という率直な疑問が浮かんだので、まずはどのようなニーズがあり、誰が医療支援の統括をしているのかを探りに、柴田（和香）先生と国境に向かいました。

その際、現地に滞在したのは数日だけでしたが、一人から聞いた情報を頼りにまた次の人を探しに行くという作業を通じて、現在の活動の基礎となっているタチアナ先生やカルパチアハウスの皆様にお会いすることができました。そして皆様の協力の下、AMDAが活動する上で重要な情報を集めることができ、AMDAと現地の人々をコネクトし、かつ活動の基礎を作ることができました。また、7月からは赤十字と協力した大学の学生主体の活動が始まり、学生は医師のアシスタントとして医療ボランティアに従事しています。

私はこの活動を通して、たくさんの素晴らしい志を持った人々にお会いすることができて光栄だと感じました。同時に、「避難者の方々に支援ができた」と自己満足になるだけでなく、本当の意味で人道危機による故郷を追われた避難者のお力になれたらなと思っております。避難者の皆様が一日も早くそれぞれの故郷に帰還できることをお祈り申し上げます。（ハンガリー国立センメルweis大学医学部 志井田 海）



## ウクライナ避難者支援活動派遣者より

2ヶ月半の現地での活動を通じて、実に多くの方々に会いました。7、8月は、ウクライナからハンガリーに出稼ぎに行かれる女性が多くいたことが印象に残っています。事情を伺うと、皆さん一様に、「ウクライナの経済状況は酷く、仕事を探すのは難しい。ハンガリーで働いて家族を支えたい」と話してくださいました。

また、人数はさほど多くはありませんが、ヘルプセンターを経由してウクライナに戻られる方もおられます。人道危機開始後、数ヶ月に亘ってウクライナ国外に避難していたものの、経済的に国外避難生活が困難になったことから、ウクライナ帰還を決断された方もいらっしゃいました。

人道危機が長期化し、国境を超える方々の事情も多様化しているように感じます。我々にできることは限られているかもしれませんが、今後もウクライナ情勢に目を向け、今できる小さな支援を積み重ねることが大切だと感じました。

(AMDA 緊急救援ネットワーク調整員 池田 敬)



今回ウクライナ避難者支援に参加させていただけたことに感謝します。私が主に活動したヘルプセンターは、避難してきた方が次の目的地に行くまでの通過点でした。そのため滞在時間も短く、彼らと接する時間も限られていました。言葉が通じず、翻訳アプリを使用しているコミュニケーションは想像以上に難しいものでした。何かを訴えてきても、正確に理解することができず、相手の方が諦めてしまうこともあり、看護師としてこれほど自分の無力さを感じた活動はこれまでにありませんでした。

しかし一方で、皆様からのご寄付で、ウクライナ国内の支援を必要とする人々に食糧品が届けられた時の笑顔の写真を見せていただく機会もあり、現地での支援だけでなく海を越えて日本のウクライナに対する気持ちが届いていることは感慨深いものでした。一人ではできることはほんのわずかなことですが、多くの人のウクライナに対する気持ちがきっとこの状況を変えていってくれると願っています。

(AMDA 緊急救援ネットワーク看護師 押谷 晴美)



7月15日から第7次医療チームとして1ヶ月の活動をさせていただきました。暑さが残る季節で、長時間の移動で来られた避難者の方々には疲労が見られました。全ての避難者の方たちの状況を確認し、より良い健康状態で次の避難先へ送り出すため、メディカルチェックシートを作成し一人ひとりに聞き取りを行いました。

症状がある方には医師の診療への橋渡しを、大きな既往症がある方には健康指導を実施し、要配慮者となり得る方々には現在困っていることはないか等を確認しました。

一人ひとりとお話する中で、メディカルチェックを機に、持病の不安や家族について話して下さる方や、ウクライナの自宅や町の様子を写真や動画で見せて下さる方、AMDA や日本について興味を持って下さる方もいました。AMDA や日本の多くの人々がこの人道危機に変わらず関心を持ち、平和を祈っていることを伝えました。

(AMDA 緊急救援ネットワーク看護師 東島 紋子)



## 倉敷ビッグアメリカンショップ LABREA 店がチャリティーイベントを開催



普段は募金箱を設置しているだけなのですが、今回のイベントは、倉敷ビッグアメリカンショップ LABREA 店として、微力ながら社会貢献することができないかと考え、企画しました。『お買い物、体験するコトが誰かのためにつながる』をテーマに協賛していただき、『Seed Corporation』さんによるインポートスニーカーとサンダル、『DOMINGO』さんのタイダイ染め体験、『マルゴデリ』さんのフレッシュジュースの販売といった内容で、売り上げの10パーセントを寄付させていただきました。当店としましては、お客様に楽しんでいただけること、その先で社会貢献につなが

っているということ形にしたかったので、当日は多くのお客様、特にお子様にも楽しんでいただけ、非常に有意義な2日間となりました。今回の私どものチャリティーイベントが少しでもお役に立てれば幸いです。ありがとうございました。

(倉敷ビッグアメリカンショップ LABREA 店 店長 中村 正和)

## 気仙沼市商店街からの便り

コロナが広がりもう3年が経ち、また各地で天災や戦争、物価上昇と大変な時代になってストレスを感じる方も多いのではと思います。私たち内湾地区も区画整理が終わりつつあり、観光客などのお客様が多くなろうとした矢先に発生したコロナ感染で、店主たちも悲鳴を上げています。

近頃コロナの感染者数も減ってきてはいますが、夜の飲食店にはまだまだお客様が戻る気配がありません。そんな中、コロナ以前より商店街の一角で『うたっこライブ』を開催していただいた方より、長引くコロナでの食費軽減として食料品支援の話が持ち上がりました。このような経緯で、食料品支援の活動を2年前より協力して行っています。しかし、物価高騰により食料品なども集まりにくくなり、いろいろと模索している時に AMDA の方から協力のお声がかかり、大変助かりました。

これまでは平日しか配布できなかったものの、小さなお子様のいるご家族から「平日は行けない」という声もあり、今回改めて週末の9月25日(日)に配布を行いました。

その際、子供も一緒に楽しんでもらおうと、商店街恒例の『子供ビンゴ大会』を組み合わせて行いました。大勢のお客様に来ていただいた結果、商店街もご利用いただき、「賑わいづくり」にもなりました。

皆様にはアンケートを書いていただき、大半の人が継続と感謝の気持ちを綴っていました。大変な時代だと身の引き締まる思いです。「子供とのビンゴも楽しかった」「またしてください」との声も多く、今後も何かしらの子供のイベントと一緒に継続して行うつもりです。

(気仙沼市南町紫神社前商店街 事務局長 AMDA 参与 坂本 正人)



## 使わないで眠っている年賀はがき、官製はがき、切手はありませんか

切手、ハガキは未使用のものであれば、古いものでも差し支えありません。ご協力よろしくお願いいたします。書き損じはがき、未使用切手等を右記までお送りください。

〒700-0013  
岡山県岡山市北区伊福町3-31-1  
特定非営利活動法人 アムダ  
「書き損じハガキ・切手」担当 行

## パキスタン洪水被災者支援活動

2022 年 6 月以降、モンスーンによる豪雨や北部山岳地帯の氷河溶解を受け、パキスタン国内では大規模な洪水が多発。パキスタン政府によると、死者数 1,678 人、負傷者数 12,864 人、そして 205 万軒もの家屋が損壊するなど、深刻な被害となっています(9 月 29 日発表)。

8 月より AMDA は、パキスタン国内の協力団体と連絡を取り、被災状況や支援ニーズなどの情報収集を開始。9 月時点で 3,300 万もの人が被災している状況を受け、9 月 20 日に調整員 1 名を現地に派遣しました。

派遣された池田敬調整員は現地協力団体である NRSP (National Rural Support Programme)、ハムダード財団、AMDA パキスタン支部のバカイ氏 (バカイ財団) と面会し、バローチスターン州およびシンド州における各団体の活動地を訪問。洪水で家が流され、多くの方々が道路わきにテントやビニールシートなどで簡易的な住居を作り、雨風をしのいでいる現状などを確認しました。そこで協力団体とともに、小麦粉や米などを詰めた食料配給袋や蚊帳などを配布し、被災された方々が必要とするものをお渡しすることができました。(29 日に一旦活動を終了)

池田調整員は活動後、「被災地の一部地域では水が引かず、依然として多くの方々が路上や避難所で生活をしており、食料や安全な水の配給、医療サービス等の継続的な支援が求められています。また、今後は、崩壊した建物・住居の再建や公共サービス (水道・電気・ガス) 再開、道路・橋等のインフラ整備等の復旧フェーズに入ります。パキスタンの現状に目を向け、自分たちに何ができるのか、改めて考える必要があると感じました」と話しました。



バローチスターン州とシンド州を繋ぐ橋が流され、交通もストップしている状況



シンド州で食料配給袋を配布する池田調整員

(GPSP 支援局 総務担当 ブルックス 雅美)

## 写真で語る「ウクライナ避難者支援」開催



8 月 19 日から 21 日、「写真で語る『ウクライナ避難者支援』」と題し、岡山市生涯学習センターにて写真展を開催しました。

AMDA は 3 月よりハンガリーを拠点に、ウクライナ国内外へ避難される方々に対し必要な支援を実施してきました。この写真展では、AMDA 本部に届いた活動写真だけでなく、様々な事情を抱え避難してこられた方々、そして国籍を問わず避難者を支える方々から伺ったエピソードも一緒に展示しました。更に、ハンガリー・ベレグスラーニーのヘルプセンターでウクライナの子どもたちが絵を描いた布を日本に持ち帰り、今度は写真展に来場した子どもたちにその布に「平和」をテーマに絵を描いてもらいました。また、避難されたウクライナの方々が「美しい」と言われる、人道危機前のウクライナでの景色・家族などの写真も併せて展示しました。

実質 2 日半という短い開催期間ではありましたが、115 名の方にご来場いただきました。ご来場者の方々からは、「写真展でウクライナの方々に起きていることを知ることができた」という声、そして「一日も早く笑顔と日常が戻ってきますように」という祈りなどのコメントをいただきました。

今回ご来場いただいた皆様、ありがとうございました。更に多くの方にご覧いただきたく、別の機会も検討していけたらと考えております。どうぞよろしく願いいたします。

(GPSP 支援局 総務担当 ブルックス 雅美)